

とも
友だち
～ぼくとゆう君～



た・だ・い・ま・・・

「おかえり。
どうしたの？ 元気ないわね。
だれかとけんかでもしたの？」

.....

「だまってちゃ わからないでしょう？」





ゆう君、**がん**なんだって。

それで、
入院しなきゃいけないって……

…… **だって** 知らなかったんだもん。

ぼく が小学校3年のとき、ゆう君は近所に引っ越してきた。

「ひとりっ子なんだって。
ちゃんとおあいさつできてたわ。
すこしはあなたも^{みなら}見習いなさいよ。」

そう話すおかあさんが、ちょっと^{はらだ}腹立たしかった。

ふん、なんだ、
あんな青白いヤツの
^{みかた}味方して。



「ゆう君はね、体が弱いらしいの。
だから体育の授業も^{じゅぎょう}見学することが多いんだって。
^{なかよく}仲良くしてね。明日からいっしょに学校行ってあげなさい。」



それから、

ぼくはゆう君といっしょに学校に行くようになった。



夏休

みが終わってすぐ、

しょくいんしつ
職員室に入っていくゆう君のママを見かけた。

次の日。



「みんな聞いてください。
こんど、ゆう君が
入院することになりました。」

はっけつびょう 「…白血病という、けつえき血液の
がんで…」



えっ！入院？
がん？
白血病！？
ゆう君が？
死んじゃうの？



下校

の時。



「……」

なにしてんだよ。
そんなにノロノロ歩いてたら
先に帰っちゃうよ。



何で
だまっていたんだよ!

入院するんだろっ!
元気になって帰って来なかったら
ゆるさないからな!

えっ! なに?



その夜。

「お父さんとゆう君のお父さんとは
学生時代から友だちなんで、いろいろ話をしていたね、
今度息子が入院することになったって聞いたよ。」

知ってたんだ。
それで、ゆう君 死んじゃうの?



「うちの近くの病院が白血病の専門だから、
それでこっちに引っ越してきたんだ。」

「お医者さんからは、抗がん剤とかの治療のこともあって
しばらく入院することになるけど、
とくに心配はいらないうて言われているそうだよ。」

勉強は？

「病院の中にクラスがあるんで、
しばらくはそこで勉強することになるそうだよ。
たまにみんなで
学校の様子を教えに行きに行ったら？」

うん。



数日後。

ごめんな
知らなかったんだ。

誰も教えてくれなかったから。
だから、
みんなといっしょになって、
だから…



えっ、
何のこと？



いいよ、そんなこと。
前の学校ではもっと…
だれも声をかけてくれなくて、
友だちもできなくて、
遊んでもくれなくて、
すごくさびしかったんだ。

そのころに比べれば、
ぜんぜん。

なあ、早く学校にもと戻って来いよ。



子どものがん(小児がん)

15歳未満の子どもにできるがん(悪性腫瘍)が「小児がん」と呼ばれます。全国で年に2000人前後が発症しているとみられます(※1)。小児1万人あたりだいたい1人になる計算です(※2)。最も多いのが血液のがんである白血病で、小児がん全体の約4割を占めるとされています。ほかに脳腫瘍や骨肉腫、神経芽腫、横紋筋肉腫など様々ながんがあります。

(※1) 国立がん研究センター がん対策情報センターのホームページ「がん情報」より
(※2) 15歳未満の人口推計を基に計算

今は、治るがん

かつては子どもが白血病になると、全員が亡くなってしまふ、まさに「不治の病」でした。それがいまは「治る」ケースが8割以上。いろいろな薬が開発され、それらの組み合わせが工夫されて「治る」病気になってきたのです。子供の命を救いたい—医師や研究者らの願いが医学の発展を押し進めてきたのです。ただ治療が難しいがんもあり、さらに研究が続けられています。

子どものがんと大人のがん

小児がんの多くは原因が不明です。ただ、大人に多いがん、例えば胃がんとか、大腸がん、乳がんは子どもにはほとんどみられません。大人の場合は、たばことか、食事、肥満など、生活習慣と密接に関係していますが、小児がんは異なる仕組みで発症すると考えられます。

院内学級

闘病中の子どもたちにとって、大きな課題が「教育」です。クラスの友達と一緒に学びたくても、難しいことも少なくありません。そんな子どもたちのために、特別支援学級を設けたり、教師を派遣したりして教育を行うことが、学校教育法に盛り込まれています。幼いころに小児がんを患いながら、高校、大学に進学する子どもも増えています。将来への不安を除くにも、学ぶ機会が公平でなければいけません。

◎ネットでの小児がんに関する情報は……

小児がんへの対策

がん対策の基本となるがん対策推進基本計画に小児がん対策の拡充がうたわれています。その一つが、小児がん診療を担う拠点病院の整備です。

小児がんは、多くの病院で治療されてきましたが、実績を蓄積・分析するのに困難があり、治療の進歩を阻む要因ともされました。その改善を目指すのが拠点病院です。2013年に全国7ブロックに計15病院が指定されました。

家族の宿泊施設

ブロックごとに小児がん診療の拠点病院が整備されたとしても、各地から入院・通院するのは大変です。ふつう病院内に宿泊施設は設けられていません。家族は病院近くのホテル等に泊まって世話をあたらなければなりません。金銭的な負担も大変です。一部民間企業の社会貢献活動で宿泊施設がある場合もありますが、もっと多くの整備が求められています。

二次がん

小児がんの多くが治るようになった今、大きな課題になっているのが「二次がん」です。小児がんが治癒した後、10年とか15年以上たって別の場所にできるがんのことで、「再発」ではなく小児がんを治療した放射線や抗がん剤の影響と考えられます。小児がんでどんな治療を受けたのか、それを知っておくことで、仮に二次がんが生じた場合も「次の手」を打ちやすくなります。個人の治療記録を蓄積しておくことが重要です。

就労・結婚

小児がんの体験者の就職、結婚に対する差別・偏見も残っていると指摘されています。また結婚に際しても病歴ゆえに何らかの障害が起きているケースもあるので推察されています。

小児がん対策は、治療の発展という側面にとどまらず、社会的・経済的側面を踏まえた息の長い総合的な対策が望まれる分野の一つです。



監修：

聖路加国際病院 顧問

細谷 亮太

東京都世田谷区立池之上小学校 主任教諭

庄子 寛之



公益財団法人

日本対がん協会

<http://www.jcancer.jp/>

〒104-0061

東京都中央区銀座7-16-12

G-7ビルディング9階

TEL:03-3541-4771 FAX:03-3541-4783